

日本古典文学全集

上古
代事
歌
謠記

校注・訳

鴻 萩
巢 原
隼 浅
雄 男

小学館・刊

古事記 上代歌謡

日本古典文学全集 1

昭和48年11月5日 初版発行

校注・訳者 おぎ はら あさ お
 萩 原 浅 男
 こう のす はや お
 鴻 巢 隼 雄

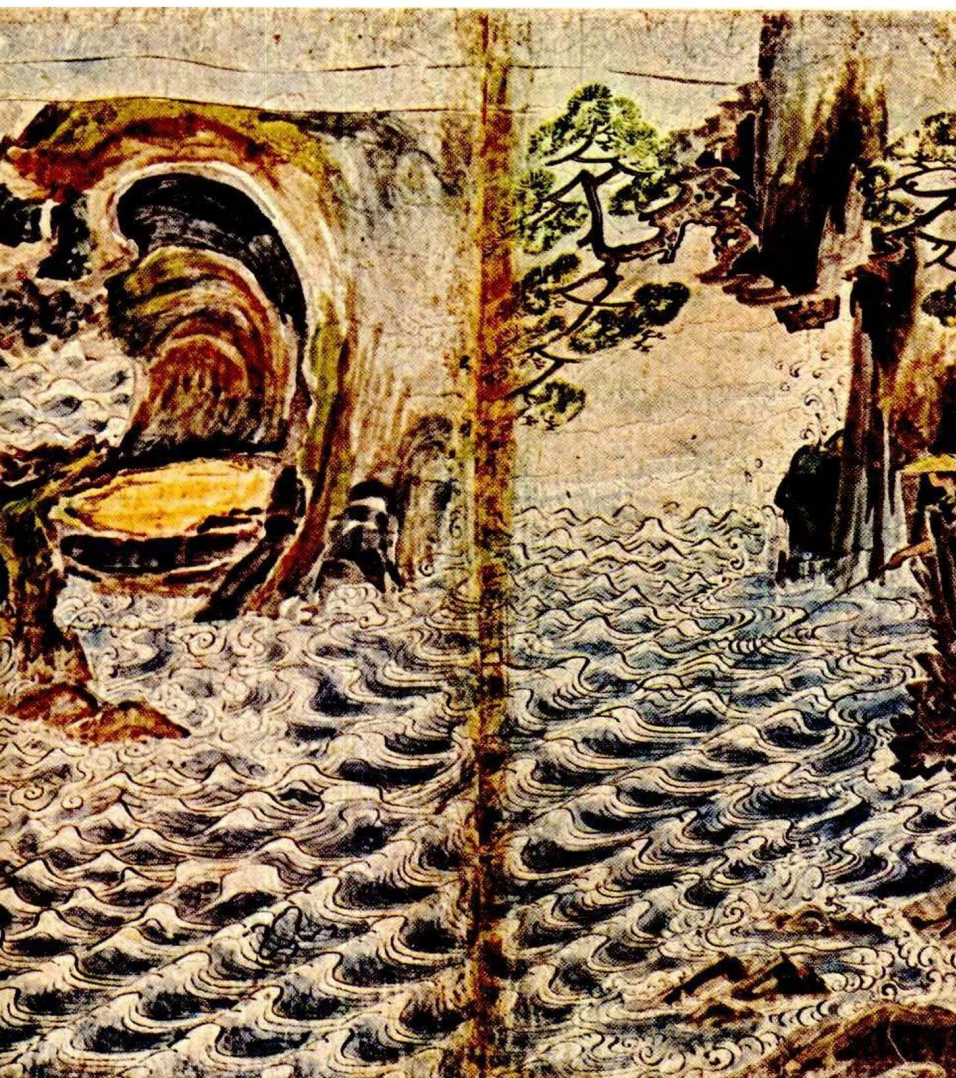
発行者 相 賀 徹 夫
 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

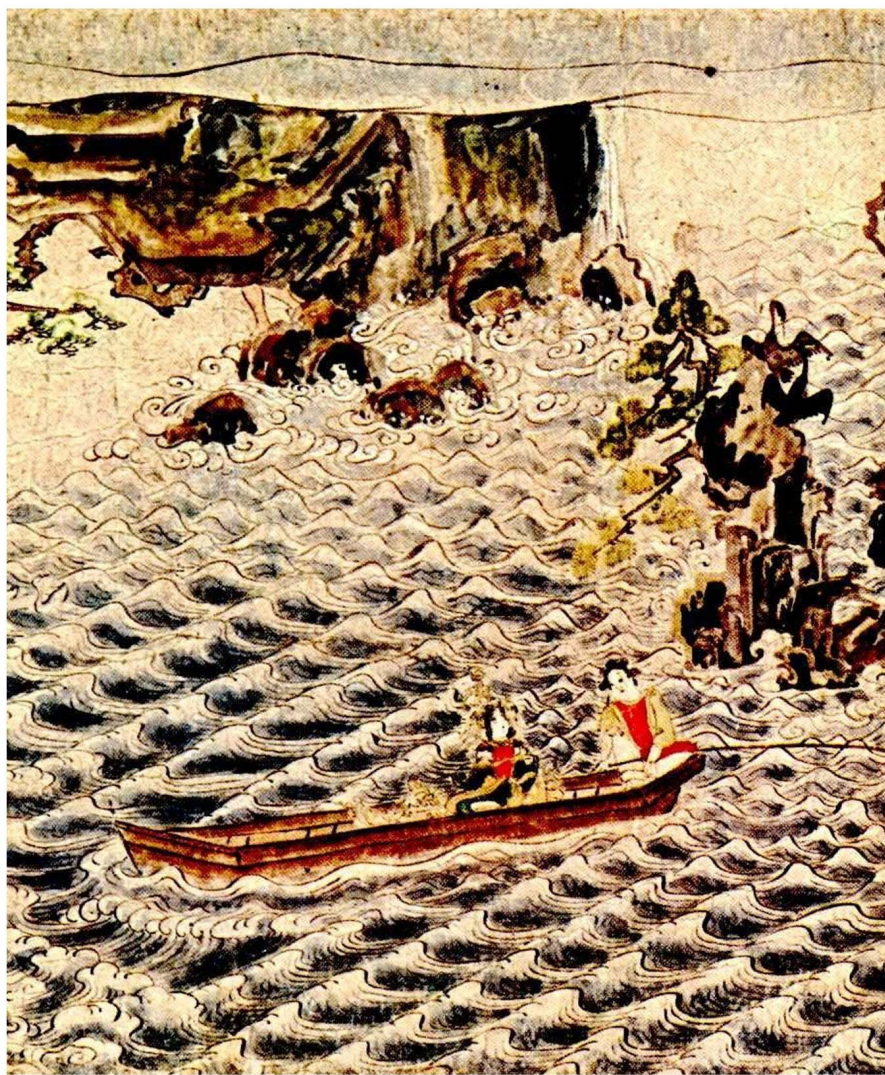
印刷所 凸版印刷株式会社
 東京都台東区台東1-5

発行所 株式会社 小 学 館
 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
 〔郵便番号〕101 〔振替〕東京 200
 〔電話番号〕東京 03-263-2111

©A. Ogihara H. Kōnosu
 1973
 (著者検印は省略いたします)

造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場
合は、おとりかえいたします。







浦島明神縁起絵巻／部分

京都・宇良神社(浦島神社)蔵

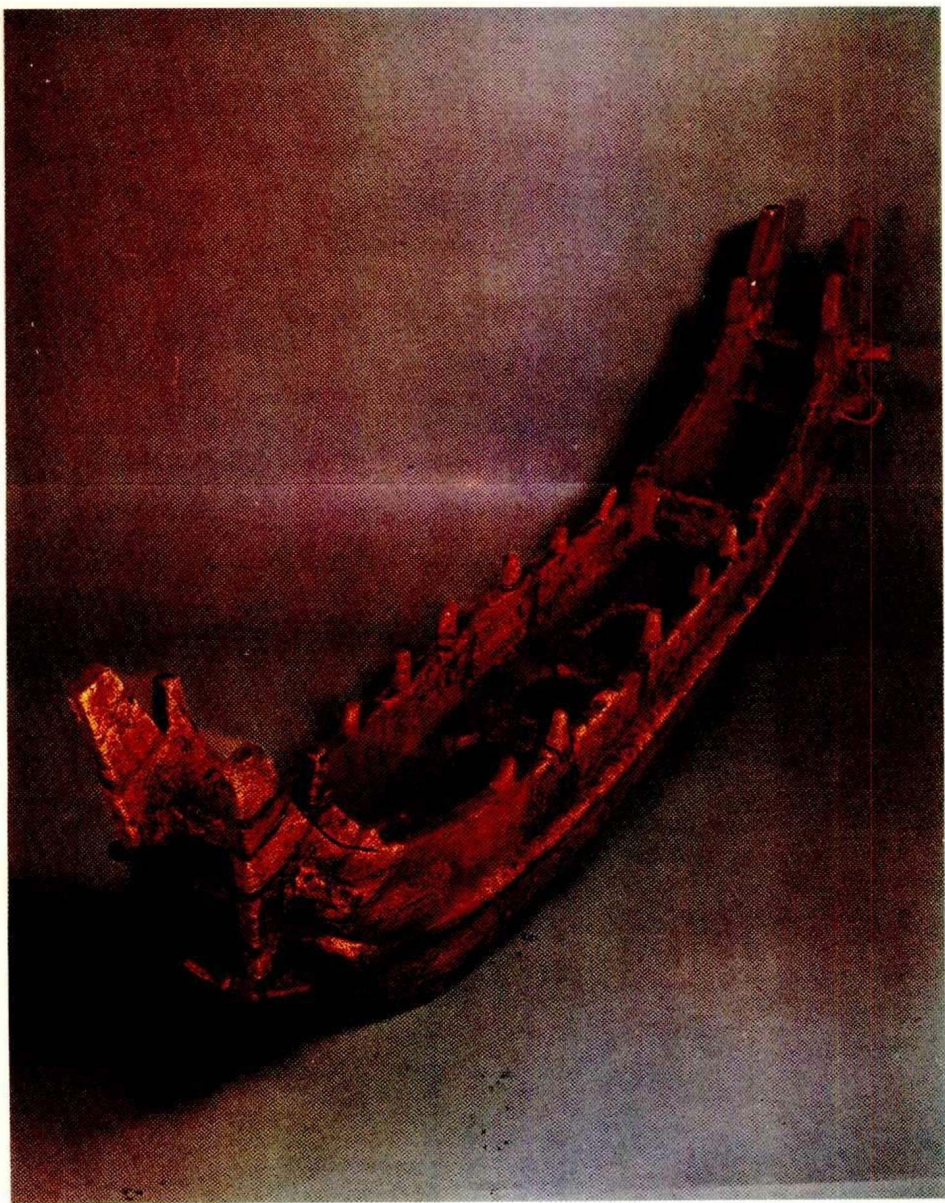


東京の亀塚古墳や大阪府郡川などから出土した中国鏡をまねてわが国で鑄造された鏡で、図像の配置なども均整でない。

この鏡の特徴は、外縁に、癸未^{みづのえ}年の八月、王^{わう}が意柴^{いさい}沙^さ加^かの宮にいた時にこの鏡を作った云々という意味のことが、四十八の借音文字によって和式漢文体で表わされていることである。

癸未^{みづのえ}年が四四三年か五〇三年かなど諸説があるが、日本に文字が伝来し使われはじめたころの、最も古い金石文の一つとして貴重なもので、国宝となっている。直径一九・八cm。出土地は不詳。

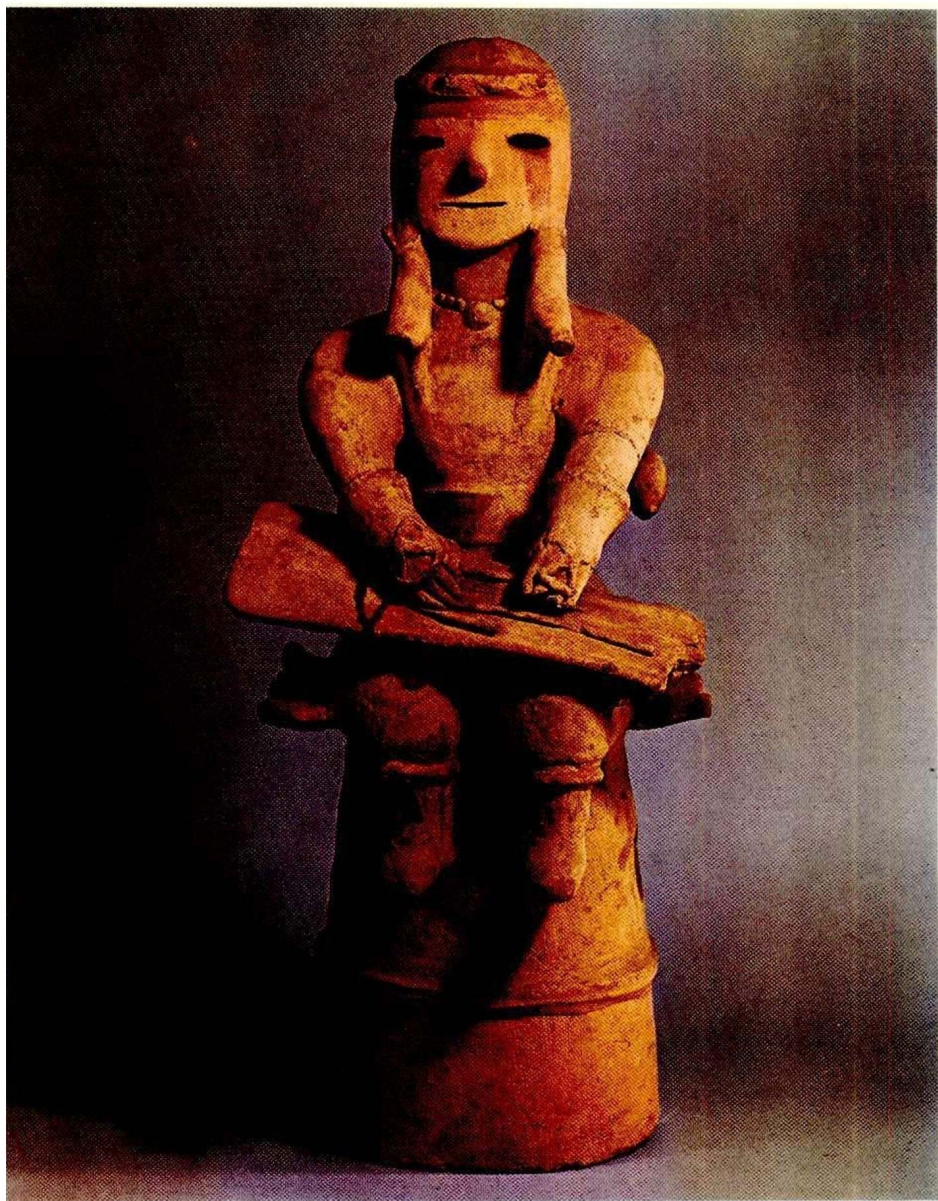
(村井崑雄)



舳と艫がたち上がり、船腹には波よけ板がつけられ、舷側には左右各六個の櫓べそをつけた整った形を示す。宮崎県西都原古墳出土のもので、長さ一〇一cm。

四方を海で囲まれたわが国では、船は漁労用としてのみならず、古代の交通機関としてきわめて重要であった。古代歌謡に、当時の人々のさまざまな情感をのせて波上に浮かぶ船を歌ったものが少なくないのは、そのためであろう。また船は古墳の壁にも描かれているが、これは、黄泉の国への旅立ちを暗示するものとも考えられる。

(村井崑雄)



『日本書紀』には神功皇后が琴を弾かせて神のお告げを聞いたという説話が伝えられるが、琴はすでに、弥生時代の登呂遺跡から発見されており、奈良時代には、琴と書とは貴族の教養として尊ばれ、『万葉集』にも琴は登場する。

関東地方では、琴をかたどった古墳時代後期の埴輪がいくつかあるが、これもその一つ。大刀を腰にし、三角文様の帯を巻いて盛装した姿は、単なる楽人ではなく、儀式にたずさわる貴人であることがうかがわれる。群馬県前橋市朝倉出土のもので、高さ七二・六cm。

(村井崑雄)



「海幸・山幸」の話は詩情も豊かで、海洋日本のはるかなる原郷をしのばせる。前半が〈失われた釣針〉、後半が〈豊玉姫〉という二つの複合形式とみる説、また山幸彦が海幸彦を水で苦しめる部分を、海と山との対立闘争による洪水神話とみて、間に〈洪水〉を入れる三部構成説もある。

『彦火々出見尊絵』の原本は伝わらないが、明通寺、曇華院、宮内庁書陵部などに忠実な模写本がある。原本欠損のため、本文には空白部分が多く、読みがたい所もあるが、ほぼ全容はうかがえる。詞書は飛鳥井雅経、絵は常盤光長と伝える。彩色、文様なども華麗で、光長系の作品として注目され、模本ながら、遺品の少ない十二世紀の作例を伝える資料的価値はきわめて高い。



彦火々出見尊絵／部分 宮内庁書陵部蔵

詞書の内容は、記紀の神話とはかなり違って民話的な色彩が濃く、いろいろな問題を含む絵巻である。画中には、ところどころ場面説明の書き入れがある。図は、潮満ちの珠を水にひたして振り、兄を水におぼれさせて苦しめるところ。

寛文ごろの模写で全六巻、縦三一・四cm。(中村義雄)

古事記上卷 序并

臣安萬侶言夫混沌既凝氣象未敷若為誰知其然
乾坤初分叁神作造化之首陰陽斯開二靈為萬品之祖
所以出入幽顯日月軌於洗目浮沉海水神祇里於滌身故太
素杳冥日本教所識孕五產鴻之時元始綿邈賴先聖
而衆生神立人之世是初懸鏡眩昧而石玉相續要鈎切地
以方神蕃息與議安河而平天下輪小瀆而清國土皇極
仁波命初降于高千嶺神倭天皇經歷千秋津湯化熊出

現存する古事記の諸本の中で最古の古写本。真福寺の僧賢瑜が応安四（三七）年から翌五年にかけて書写したもので、これに師である真福寺第二世の信瑜が校訂を施している。

原本は三帖の粘葉装。表紙は焦茶色の絹を用い、その裏は金の切箔を施した布目紙を貼り、題簽は各帖とも金の切箔砂子を押しした布目紙に「古事記上」（中・下も同様）と墨書。各帖の表紙の見返しには「文政四年辛巳九月日令修理畢 寺社奉行所」と記す。国宝に指定された貴重な文献である。縦二三・五cm、横一四・五cm。

（荻原浅男）

古事記 上

望賢四方山止其居且其廣大焉
 名曰明古郡指之時一座走登於此丘鳴其聲比故号
 曰里此里有此礼墓土神大等津爲今所収号指墓者昔
 大常日子今排尔南到煉之御儀刀之八咫劍之上結尔
 八咫弓下結尔麻布都鏡繫時聖七郡山直等九種是
 長令正爲煉而排下行之時到攝津國高麗王
 請欲度此河度子紀行國人小至中日我爲天皇聖人否
 尔時勅云朕公雖然獲度度子對曰過欲度者宜賜
 度皆於是所取爲通行儀之弟得授入舟中則錄先
 明烟然滿舟度子得質乃度之故云朕君治達未
 名都廣所并供進所食故曰廣所并今時年有別煉
 間而整爲長之所適度我南毗都麻場於是天皇乃到
 賀左松原而重訪之於是白犬向海長咆天皇問云是
 誰犬乎漢受武良首對曰是別煉所養之犬也天皇
 勅云好告武故号告首乃天皇知在於此少場所破度
 到阿閉津供進所食故号阿閉村又捕江魚爲所坏物
 故号所坏物故号所坏江又乘舟之廣云括作樹澤逐
 度相遇勅云此場隱要更仍号南毗都麻於是所并
 与別煉舟同編合而編抄誤伊志治尔居号大中伊志
 治還到迎尔南六越村始成等事故曰六越村勅云此
 電浪響鳥聲其詳南連於高宮故曰高宮村是時
 造爾殿之廣所号泊屋村造賢殿之廣所号賢田村
 造宮之廣所号錦村又遷於城宮田村仍始成賢也
 後別煉榻床仕奉出雲臣比須良比賣給於皇長令
 泰有賀古驛西有手別煉堯於此宮所作墓於日

風土記伝本のうち、最も
 古い姿を備えるものの一つ
 で卷子本。書写は平安中期
 以後で、国宝である。

まとまった形の『播磨国
 風土記』は長くその所在が
 知られず、世に知られるよ
 うになつたのは、寛政八年
 に柳原紀光が、嘉永五年に
 谷森善臣が転写してからで
 あり、今日の播磨風土記唯
 一の祖本として貴重なもの
 である。巻首とそれに続く
 はずの明石・赤穂二郡の部
 分がないのは撰進者がこれ
 で完成していると考えたの
 か、まだ編纂の途中だった
 のか、なお疑問がある。あ
 るいは、未精選だった草稿
 本の形式をそのまま伝えて
 いるのであろう。縦二八・
 〇cm。
 (鴻巣隼雄)



大和一の宮、大神神社の四月九日の例祭に奉納される舞で、崇神紀八年の条にその縁起が見え、天皇がこの社に行幸して酒宴を催した時、大神の掌酒の活日が天皇に神酒を献り、「この神酒は我が神酒ならず、倭成す大物主の醸みし神酒、幾久、幾久」と歌ったという。

祭神の大物主神は酒造の神徳も備え、三輪の枕詞に「味酒」という語が用いられるほど。この献酒歌に合わせて舞う巫女の手草が杉の枝であることから、この舞の名がついたのだろうが、この杉は大神神社の神木であり、これで作られた杉玉は、大神の神の依代として、酒造家の軒先につるされる。

(荻原浅男)

萩原 淺男校注・訳

凡
例

一 古代への回顧

三 元明天皇と『古事記』の完成

一 五柱の別天つ神

二 神世七代

一 淤能碁呂島の聖婚

二 国 生 み

三
神
生
み

四 伊耶那美命の死と火之迦具土神

五 伊耶那岐命の黄泉国訪問

六 伊耶那岐命の禊祓

七 三貴子の分治

天照大御神と須佐之男命

一 須佐之男命の昇天

二 二神の誓約

三 須佐之男命の勝さび

四 天の石屋戸こもり

五 須佐之男命の追放と五穀の起源

須佐之男命の大蛇退治

一 八俣の大蛇

二草薙劍

三 須賀の宮

大國主神の事績

一 因幡の素兔

二 大国主神の受難

三
根国行き

四 沼河北売への求婚

五 須勢理毘売の嫉妬	一〇四	三 八咫鳥の先導	一五〇
六 大國主神の子孫	一〇七	四 兄宇迦斯と弟宇迦斯	一五二
七 少名毘古那神と御諸山の神	一〇九	五 久米歌	一五八
八 大年神の系譜	一一一	六 皇后の選定	一六二
葦原中国のことむけ		七 多芸志美美命の反逆	一六六
一 天菩比神の派遣	一一三	綏靖天皇	一六九
二 天若日子の派遣	一一五	安寧天皇	一七〇
三 建御雷神の派遣	一二〇	懿德天皇	一七二
四 言代主神の服従	一二三	孝昭天皇	一七三
五 建御名方神の服従	一二三	孝安天皇	一七五
六 大國主神の国譲り	一二四	孝靈天皇	一七五
天孫邇邇芸命		孝元天皇	一七五
一 邇邇芸命の出生と降臨の神勅	一二六	開化天皇	一七八
二 猿田毘古神の先導	一二八	崇神天皇	
三 天孫の降臨	一二九	一 后妃と御子	一八三
四 天宇受売命と猿田毘古神	一三二	二 三輪山の神を祭る	一八四
五 木花之佐久夜毘売との聖婚	一三三	三 三輪山伝説	一八六
火遠理命		四 建波邇安王の反逆	一八八
一 海幸山幸	一三六	五 初国知らしし天皇	一九一
二 海宮訪問	一三八	垂仁天皇	
三 火照命の服従	一四一	一 后妃と御子	一九三
四 鵜草葺不合命	一四二	二 沙本毘古と沙本毘売	一九五
中卷		三 啞の本牟智和氣王	二〇〇
神武天皇		四 丹波の円野比売	二〇六
一 東征	一四九	五 時じくの香の木の実	二〇七
二 熊野の高倉下	一五三	景行天皇	

一	后妃と御子	三〇九
二	大碓命	三二
三	倭建命の熊曾征伐	三二
四	倭建命の出雲建征伐	三六
五	倭建命の東国征伐	三七
六	美夜受比売との合歡	三三
七	望郷の歌	三五
八	天翔る白鳥	三八
九	倭建命の子孫	三〇
	成務天皇	三三
	仲哀天皇	三三
一	后妃と御子	三三
二	神功皇后の神がかりと天皇の崩御	三五
三	神功皇后の新羅親征	三八
四	忍熊王の反逆	四〇
五	角鹿の氣比大神	四三
六	酒樂の歌	四三
	応神天皇	四三
一	后妃と御子	四五
二	三皇子の分担	四七
三	矢河枝比売との結婚	四九
四	日向の髪長比売	五三
五	吉野の国栖の歌	五四
六	百濟の朝貢と酒の歌	五六
七	大山守命の反乱	五七
八	天之日矛の渡来	六二
九	秋山の神と春山の神	六五

	一〇 天皇の子孫	三六
	下卷	
	・仁德天皇	
一	后妃・御子と御名代	三七
二	聖帝の御世	三七
三	妬み深き石之日売皇后と古備の黒日売	三七
四	石之日売皇后の嫉妬	三六
五	筒木宮の石之日売皇后	三八
六	速総別王と女鳥王	三八
七	雁の卵	三八
八	枯野という名の船	三八
	履中天皇	
一	后妃と御子	三九
二	墨江中王の反乱	三九
三	隼人の曾婆訶理	三九
	反正天皇	三九
	・允恭天皇	
一	后妃と御子	三九
二	即位と氏姓の正定	三九
三	輕王と輕太郎女	四〇
	安康天皇	
一	根臣の陰謀と大日下王	四六
二	目弱王の復仇と大長谷王	四八
三	市辺之忍齒王の難	三三
	雄略天皇	